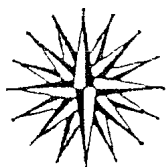


日本近代文学における「向う側」

—母なるもの性なるもの—

鶴田欣也



明治書院

著者略歴

鶴田欣也 (つるた・きんや)

1932年、東京都に生まれる。

上智大学英文学科卒業。

ブリティッシュ・コロンビア大学教授。

日本近代文学専攻。文学博士。

主要著書

- 『芥川文学』(共編, 1972, 早稲田大学出版部)
- 『芥川 川端 三島 安部 現代日本文学作品論』(1973, 桜楓社)
- *Approaches to Modern Japanese Novel*
(Co-editor, 1976, Sophia University Press)
- 『「山の音」の分析研究』(共編, 1980, 南窓社)
- *Approaches to Modern Japanese Short Story*
(Co-editor, 1982, Waseda University Press)
- 『川端康成の藝術—純粹と救済』(1981, 明治書院)
- 『川端康成「山の音」研究』(共編, 1985, 明治書院)
- 『日本とカナダの比較文学的研究』(共編, 1986, 文芸広場社)

☐世界の日本文学シリーズ 2

日本近代文学における「向う側」

—母なるもの性なるもの—

定価 2,800円

昭和61年8月1日 発行

著者 鶴田欣也

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

印刷者 株式会社 柳沢印刷

代表者 柳沢 一郎

製本所 正文社製本

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京(03)292-3741(代)

振替口座 東京 3-4991番

©1986 Kinya Turuta 3393-20180-8305

もくじ

第一章	「向う側」の文学	3
第二章	西洋文学の「向う側」	33
第三章	幸田露伴「對鬮體」	75
第四章	泉鏡花『高野聖』	97
第五章	夏目漱石『草枕』	144
第六章	芥川龍之介『素盞鳴尊』	173
第七章	谷崎潤一郎「蘆刈」	187
第八章	川端康成『雪国』	213

第九章	太宰治『お伽草紙「浦島さん」』	231
第十章	安部公房『砂の女』	248
第十一章	古井由吉『聖（ひじり）』	278
あとがき		301

第一章 「向う側」の文学

1 日本近代小説における「向う側」

北米で日本の近代小説を教え始めてから、もう二十年ほどになる。あるとき、妙なことに気が付いた。西洋の小説は主人公がなにかの意味で成長する過程を描いたものだといえる。始めから終わりまでには時間の経過があり、その点では主人公の旅であって、旅の終わりには始めと較べて主人公の内部になんらかの変化がなくてはならない。変化はしばしば精神的な成長を意味する。すなわち大人になるための旅である。ところが、私の教えている英訳された日本の小説にはそれが少ないことに気が付いたのである。また、旅があるとすると、それは大人になるための旅ではなくて、むしろ大人が子供になるような感じのする旅があるのに気が付いた。退行の旅といってもいいし、母胎回帰の旅ともいっていい。しかも、芸術的香りの高い作品にそれが多いように思えたのだ。日本の小説でも成長を

示す主人公はいるのだが、中途半端の感じを与えたり、文学的な感動が希薄だったりでありあまり感心しない。宮本百合子の『伸子』、『道標』、芹沢光治良の『人間の運命』などはその例であるが、大江健三郎の『個人的な体験』をそのリストに加えてもよい。

谷崎潤一郎の『瘋癲老人日記』は抒情性とはあまり関係がないが、退行のテーマを扱った小説で成功を収めた例である。身体も自由に動かせない老人が息子の嫁を媒介にして、赤ん坊に帰っていく過程を確かな筆致で描き出している。その過程で主人公は生き生きとした生命感を発揮し、しかも個性を失わない。むしろ、退行をしながら、ある種の個性を造り上げていくという不思議な作品である。日本の小説の主人公には個性が欠けていて面白くないという北米の学生の批判に私は卯木督助を挙げて答えることにしている。

抒情性の豊かな作品としては川端康成の『雪国』がある。ここでは駒子という中心人物に焦点が当てられてはいるが、雪国という自然が瞬間的ではあるが主人公の個我的な役割を果たしている。退行の過程で生き生きしてくるのは主人公の島村ではなくて、彼を取り巻く周囲である。駒子であり葉子であり、また雪国はいちだんとその美しさを増すのである。ここでは退行が女性や自然を媒介にした美の旅になっている。退行や個我的な溶解が美しさと結びついていることに注意したい。これはよく引用される志賀直哉の『暗夜行路』の大山のシーンにも同じことがいえる。

一般論になるが、西洋の小説の多くは主人公が自己の環境と戦いながら、しだいに成長し個我を確

立させていく過程を描く。そこで読者は個我確立の過程に参加する喜びを味うわけである。北米の学生の一部が日本の主人公たちの退行現象に戸惑いを見せるのは無理もない。大づかみにいえば北米では退行は逃避であり、猥褻わいせつでありまた死に対する指向性を持つものとされているからである。個を確立する健康な喜びはあっても、個の崩壊に歓喜があるはずはないのであろう。西洋特に独立戦争を経て、開拓時代を持ったアメリカでは退行と底辺で手を握っている抒情性とか美とかいうものを白い眼めで見してきたようなところがある。荒い自然や人間の中でいかに生き抜くかということに興味の中心があった。したがって彼らの小説の主題は倫理性の濃い生存のテーマである。生存とは闘いの姿勢を示唆する。闘いという言葉がアメリカ文化のキー・ワードである。闘いの状態で抒情や美は禁物である。日本でさえ戦時中に振り袖を着て外に出た娘さんがどのような扱いを受けたかを考えれば、生存と美はいかに相容あれぬものであるかが分かる。ただ、日本とアメリカの違いは生存がアメリカ文化の中心部に在り、平和の時でさえも、何かと闘っていなければならぬところではないだろうか。振り袖によって代表されるものは平和の時でさえ白眼視されるようなところがアメリカにはある。

カウボーイ・ハットを被かったジョン・ウェインが振り袖の日本の娘と一緒に撮った写真を見たことがある。二十五、六年も前のことなのではっきりは覚えていないのだが、日本の女優さんが彼を映画のセットに訪ねた記念撮影だったのだらう。あまりにも釣り合いのとれない写真だったので私の脳裏

に残ったらしい。英訳された『雪国』がアメリカで結構読まれているらしいという話を聞いたとき、私はこの写真のことを思い出した。

朝鮮戦争、ベトナム戦争を経てアメリカも一部変わった。生存文化も退行にも少し眼を向けるようになった。一方、明治以来生存を前面に押し出してきた日本もそれを主題にして小説を書く作家を持つようになった。ジョン・アブダイクの『走れウサギ』と大江健三郎の『個人的な体験』を較べてみるとそれがよく分かる。ウサギは責任をとらず、成長を拒否し、バードは責任をとって成長しようとする。少なくとも表面ではそのように見える。今後両方の文化がどのように変わっていくのか占うことはできないが、こと成長や退行に関してはどれか一つだけに固執する態度は崩れていくような気がする。一日には昼と夜があり、人には生と死があり、意識と無意識がある。生存を強調する文化でさえ、退行や死がいかに生存にとって必要な要素かということが解り始めてきたようである。

※

向う側は一日の夜の部分である。夜の部分を芸術的密度の極めて高い作品に仕上げたものをまず取り上げてみたい。この作品を少し考察してから、他の向う側の作品に触れるつもりである。その後、西洋や東アジアにある作品で向う側に似たものを取り出して比較し、日本の向う側の作品群の特徴とその意義を探ってみたいと思う。

泉鏡花の代表作『高野聖』^{たかのせい}は一九〇〇年の出版である。幸田露伴「對獨樓」^{たいどくろう}に較べると十年遅れている。向う側を扱った作品ではこの二作がいちばん早い。『高野聖』の方は構造的にはより複雑であり、芸術的な完成度も高い。その上、向う側のテーマを構成する重要な要素を全部備えている。したがって『高野聖』をその代表的な例として考察してみる。

この小説は語り手が汽車の中で知り合った僧侶から若いときに体験した不思議な物語を聞くといい形式をとっている。彼は高野山の修行僧で諸国を行脚していたが、飛驒^{ひで}から信州へ越える深山で蛇や山蛭^{やまむし}に悩まされた後、ようやく一軒の山家にたどりつく。縁側に白癡^{ばか}のような少年がだらしなく座っている。案内を乞うと、小造りの美しい婦人が出てきて、一夜の宿を引き受けてくれるという。その晩いろいろ不思議なことが起きる。彼女に伴われて谷川に沐浴^{もくよく}に行くと、婦人は自ら手で水をかけて僧の身体を洗ってくれる。後からひたとくっついてある彼女の身体で僧は花びらの中へ包まれたようだと思ふ。谷川の附近には墓^{ひま}、大蝙蝠^{おほこいろう}、小猿などがいて、婦人にまとわりつくのだが、叱^{しか}られると消えていく。谷川から帰ると、庭で馬が暴れている。婦人に仕えている親仁^{おやに}がいくら取り静めようとしても、駄目である。婦人が着物を脱ぎ、馬の前脚の間を潜って、下腹からさっと出ると、荒れ狂っていた馬がとたんにおとなしくなる。

夕飯時には婦人はかいがいしい女房ぶりを示す。なんとなく奥ゆかしい、上品な、高家のふうもある。白癡^{ばか}がだだをこねて、大きな老沢庵^{ひねたくあん}にかぶりつく異様なシーンもあるが、食後、白癡はこの世の

ものとも思われない清らかな声で「木曾の御嶽山」を唄って、僧を驚かせる。

夜が更けても僧はなかなか寝つけない。戸の外にももの気配がする。多数の獣や鳥が山家を取り巻いている。鼻息や羽音が戸板一枚を隔てて聞こえるほどである。明らかにこの家の女を求めて集まり寄ったものようである。恐ろしさのあまり僧が寢床の中で息を殺していると、隣室の美女のうめき声が聞こえる。女は獣たちを叱ると、戸外ではどよめきがあり、家が揺れた。僧は思わず陀羅尼を唱えて一心不乱である。

翌朝、僧は山を下るが里近い滝までくると、山家の婦人が恋しくなり、自分の僧侶としての生活が空しく感じられる。引き返そうかと迷っていると、婦人に仕える親仁に出会う。親仁は僧に婦人の正体を明かす。女は近在の医者娘であったが、神通力を持つ魔性の者であり、旅の男をもてあそんだ後に、息をかけて獣に変えるのだと教える。僧が庭で見た暴れ馬も実は僧の旅先で知り合った富山の葉売りであったが、それもこのように土産の鯉に化けてしまったと親仁は告げる。そして、

「いや臆て、此の鯉を料理して、大胡座で飲む時の魔神の姿が見せたいな。」

といて、僧の背中を一つ叩き、鯉を提げたまま見向きもせず山路を行ってしまふ。

『高野聖』の梗概が長くなったが、これを一つのテーマとして簡単にまとめてみると次のようにい

えないだろうか。ある若い男が自分の生活空間を離れ、旅をしているうちに、特殊な空間に迷いこむ。そこで美しい女性に出会い、彼らの間に何かが起こり、そこを男が去っていく。すなわち異性のある特殊空間体験の物語である。この場合その空間は深山の森の中であり、上の洞かみほらと呼ばれている谷間である。女は美しく、優しい。上品でもあり、また神秘的な魔力をも持っていて、恐ろしい要素もある。優しさの要素を取り出して、分析してみると、沐浴をさせてくれる、傷を癒いやしてくれる、食事を用意してくれる、床をしつらえてくれる等いわゆるケア・テイカー(世話する者)の影が濃くなり、母親の像が浮かび上がってくる。その上この女には少年のような白癡が側にいる。知能と引き換えに清らかな声を持った人物だが、主人公のドッベルゲンガーの役を受け持たされていることは明らかである。僧の深層の願望を担って女の側に残り、僧の社会的な自我は名僧となるべく行脚を続ける。特殊空間の形態、女の属性、白癡の存在などつき合わせて考えてみると、この主人公の旅には時間遡行そこうがあり、一種の母胎回帰の要素があることが明らかになる。

旅する男、非日常空間、ケア・テイカーの女、時間遡行という要素を持った小説は日本近代にはかなりあるような気がしたので調べて見ると、洩もれたのもあるかと思われるが、ざっと次のような年代順のリストができた。

(一) 幸田露伴「對鬪體」 一八九〇年

(二) 泉鏡花『高野聖』 一九〇〇

- (三) 夏目漱石『草枕』くさまくら 一九〇六
- (四) 芥川龍之介『素盞鳴尊』すさのねのみこと 一九二〇
- (五) 谷崎潤一郎『蘆刈』あしかり 一九三二
- (六) 川端康成『雪国』 一九三五—一九四八
- (七) 太宰治『お伽草紙「浦島さん」』 一九四五
- (八) 安部公房『砂の女』 一九六二
- (九) 古井由吉『聖（ひじり）』 一九七五

泉鏡花、谷崎潤一郎、川端康成には同テーマの作品が他にもあるが、代表的と思われるものだけをここに挙げておいた。芥川龍之介の『素盞鳴尊』は主人公が旅に出るところから最後までがこのテーマに該当する。その点では志賀直哉の『暗夜行路』も最後の部分に向う側の空間と向う側の女らしきものが出てくる。

これらの作品の主人公は一樣に都会からの若い男性であり、個我がかなり確立されているインテリであることが分かる。僧、画家、批評家、教師、学生というように知識人であることが多い。このことは彼らが迷い込む非日常空間が都会と対比される森、山間の村、谷間、砂丘であるということと関係がある。そしてその空間は必ず川、池、海、雪等の水と係わり、なおかつ主人公がそこに至る過程で空間的な高みからしだいに下降していくことも無関係ではない。彼らの旅が時間遡行や退行の要

素を含み、個我の溶解（たとえそれが一時的であるにせよ）の可能性を含むからである。

向う側の作品でかなり重要な役を与えられているのが現実空間から非現実空間までの道程である。例外もあるにはあるが大体において二つのことが起きる。一つは道行きはかなり困難を極めるということである。これによって主人公の体力を極度に弱めることがその目的である。時には主人公は負傷するようなこともある。もう一つは方角が分からなくなったり、高低が分からなくなったりする。都会から持ってきた地図が役に立たなくなる。時間さえ定かでない場合もある。これは主人公の持っている理性の働きを混乱させ、彼をその支配下から脱出させることにより、非理性的な向う側の空間に突入する準備でもある。作品によって、この道程が何段階にも緻密ちみつに構成されたのから、予告なしにすぐ突入するのからいろいろある。

向う側の空間の主役はそこにいる女である。女はその空間の代表者であり、「ぬし」でもあって、空間とは不可分の関係にある。その女性を他の空間に置くことは想像できない。その土地の精とでもいい。彼女たちの属性を調べてみると、一貫して、ケア・テイカーとしての母性が強いことが分かる。同時にセクシュアリティ（性的魅力）の要素も例外なしに備わっている。『高野聖』のところでは触れた女性の美しさはほとんどの女が持つ属性だが、現代に至るとその要素が少し弱まってくる。それが明らかになる。それと同時にやはり女の神秘性も薄れていくようである。しかし、それをあたかも補うように彼女らの生命力は強くなっていく。

2 外国文学における「向う側」

さて、この特殊な空間で主人公はどんな変化をするのだろうか。時間的な観点をとれば退行がある。個人的には母胎回帰であり、集団的には文化の根（クイップ、まかのぼ）に遡（さかのぼ）るようなところも見せる。空間的な観点をとれば、個我の溶解が起きるようであるが、それも瞬間的な溶解から、かなり一定期間に亘（わた）るものまである。個我の溶解はやはり女がそれを触発し、主に彼女が支配する特殊空間の自然に向けられるが、ここに ある共同体に向けられる場合もある。

以上のようなものが向う側の小説の特徴である。他に適当な名称が見当たらないので、向う側の作品と呼んだのであるが、向う側という空間だけだと女性が入らないので向う側の女の作品といったほうが正確かもしれない。

これまで考察してきた向う側の作品リストは完全なものではなくて、他にも似たような作品があると思われるし、また、リストに挙げられた作品も各々細部に互って分析すると、もつと複雑なテーマが出るかもしれない。しかし、一応このような作品群が存在すると仮定すれば、これは近代日本文学だけにあるユニークな現象なのか、それとも西洋や古代、中世にもよくある文学的な現象なのかという疑問が湧（わ）く。この疑問を解く前に、一つ明らかにしておきたい点がある。もう一度前に挙げた向う側の作品のリストを、ちょっと思いだしていただけると、都合がいいのだが、挙げられた作品のうち、『高野聖』、『草枕』、『蘆刈』、『雪国』、『砂の女』という作品は近代日本文学における代表作と

して数えられるものである。また、『高野聖』、『雪国』、『砂の女』は各作家の最高作品としてしばしば評価されている。過去百年足らずの間に向う側のテーマに沿って書かれた作品の中に近代日本文学中の名作がこれだけ含まれるという事実注目しないわけにはいかない。代表作として挙げなかった『對鶴饅』、『お伽草紙「浦島さん」』、『聖（ひじり）』等も文学作品としては高い水準にある作品であって、決して弁解を要しない芸術作品である。向う側のテーマと文学的完成度とどこかで結びつきがあるかどうかの詮索は別にして、このテーマが完成度の高い作品を生み出した豊沃な土壌であった事実は否めない。言葉を換えていえば、市民性や個我の確立を土台にして出現した西洋の小説という文学形態が、日本で育ったとき、むしろ非市民性や退行のテーマを土台にして名作を生み出して来た事実を記憶に残すべきである。

さて外国に私のいう意味での向う側の文学があるであろうか。また、あったとしたら、どのような類似や相違があるのだろうか。一般的な意味で向う側を扱った文学として東アジアでは桃源郷の文学、西洋ではユートピア文学が候補にあまりそうである。

桃源郷の文学の起源は陶淵明（三六五—四二七年）の作「桃花源の詩并びに記」である。晉の太元のころ、武陵に漁師がいた。あるとき漁師が溪に沿って漕いで行ったが、そのうちに路の遠近を忘れるほど遠くに来てしまった。すると目の前に満開の桃林が逼ってきた。美しい桃の木の林はかなりの大きさである。兩岸にまたがっていて数百歩もあろうか、ここには他の雑木は一本も生えていない。花

片が下に一面に落ちていて、雪が降った後のようにぼう々と明るい。漁師はこれは不思議なところだ、一体林の奥には何があるのかと思ひ、漕ぎ進むと、谷川の源流があり、山が立ちはだかっている。山には小さな洞ほらがあつて、その中に光が見えるようなので入つていった。はじめは狭いが、数十歩いくと、目前に広い景色が突然開けた。立派な家屋、整備された田や青々と水をたたえた池、桑や竹林などが見えた。豊かな農村の風景である。鶏や犬の鳴き声も聞こえる。種を播まく人、耕す人も見えて、平和な村のようである。村人は漁師を見て驚き、どのようにしてここに來たのかといふのでつぶさに答えた。すると、家に招じ入れ、鶏を殺し、酒を出してもてなした。村中の人々が集まり、彼にいろいろ尋ねた。彼らがいうには秦しんの乱のとき妻子を連れてこの絶境に來て以來ここから外に足を踏み出したことがない。漢の時代や魏ぎの時代があつたことも知らない。今が晉であることも知らなかつた。なにしろ、六百年も外界と交わりを絶つていたのである。他の村人も各々漁師を自分の家に招いて、酒食を供したが、漁師は数日してこの村を辞した。村人はこのことを外の人に言わないで欲しいといつた。彼は武陵に帰つてから、太守に桃源郷について報告する。太守は人を遣やつて洞穴を探させるが、迷つて見つけることができなかつた。南陽の士、劉子驥りゅうしきはこのことを聞き、探す準備をしているうちに病んで死んでしまったとのことである。以上は「桃花源の詩並びに記」のうちの「記」の部分のあらすじである。

「記」のうちに庄卷なのは漁師が谷川を遡つて、桃林を見て洞穴に達するあたりである。山の裏